

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	平成26年度は4月2日竣工、4月5、6日内覧会。4月12日より利用者受け入れ開始のため、4月1日より10日までの10日間のうち、7日間を研修日とした、その間、誠心会基本理念の学習、また10月21、22、25日と再度理念方針の学習を行った	法人基本理念、運営方針、行動指針があり、開設に向けて事前研修を受けた職員が理念を理解し意識して取り組んでいると運営者は思っていたが浸透していないと感じ、半年後に再度研修を行い職員の足並みを揃えている。ホームの理念もその後作成され法人理念と共にフロアの壁に掲示し、利用者や家族にも説明している。職員は自らの言葉で理念を具体的に語る事ができた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年、保育園から夏祭り、運動会等お誘いを受け、少人数ではあったが参加した。自治会には加入はしており、今年度、アイリス駐車場で地区の防災訓練が行われた。私たちは地区住民の一人だということを常々職員に話しており、「挨拶が気持ち良い」との言葉をいただいている。	開設に当たり地域に向けて説明会が行われている。施設見学会は職員が案内ビラをポスティングして地域を廻った。複合施設全体が地域の高齢者等の災害時の避難場所となっている。地域ボランティア(三味線、太鼓、フラダンスなど)が継続して来訪している。催し物時のボランティアもいる。中高生の職場体験など依頼があれば受け入れは可能である。様々な情報が得られるため自治会の会合には出かけていく予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度、複合福祉施設としてスタートし、地域交流ホールも併設している。そこを活用して地域に発信できる機会を作りたいと思い、今年度、キャラバンメイト養成研修に5名参加した。次年度はそれを形にしたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度開催した運営推進会議では地域資源について、また地域との協力体制について貴重な意見をいただいた。前向きで活発な意見が出たので、次年度の地域との交流行事等に活かしていきたい。	利用者家族、市議員、区長、民生委員、地域住民、介護相談員、諏訪広域連合職員、地域包括支援センター職員等を委員に併設の小規模多機能型事業所、小規模特養と合同で開催している。利用者状況など基本資料は広域の様式に沿ったものが使われている。各委員は其々の立場で質問したり、助言もあり、複合施設としては有意義な会議となっている。委員からヒヤリハットを細かく出していることに評価をいただきホームも同じことを繰り返さない為に職員も振り返りの機会としている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	今年は開設初年度ということで、諏訪広域連合職員他、茅野市西部包括支援センターを通して地区の、保健指導員の方へ事業所説明を行った。次年度は積極的に広報誌等を活用していきたいと考えている	市主催の事業所連絡会に参加している。会議は毎月あり研修、虐待のグループワーク、ケアプランの勉強会、情報交換などがあり出席している。広域の事業所会議も随時あり出席し情報を得ている。更新申請は家族が行っているが区分変更に関しては家族と相談の上、申請するようにしている。認定調査員はホームで調査するので来訪して同席する家族もいる。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修会で学んでおり、転倒リスクの多い方には低床ベッドの活用や、見守りでも防ぎきれない普段の状況等はご家族に事細かに説明、変化する状態を理解していただけるよう努力している。非常階段室には施錠しているが、「下へ行きたい」と言う時には下にいる職員(事務、)と連携をとり、その都度対応している。	身体拘束や虐待に関する研修を受け全職員が身体拘束がもたらす弊害を理解している。運営推進会議で事故・ヒヤリハット状況を公表し利用者の現状やホームの取り組みを伝えている。利用者の中には利用開始当初に比べ落ち着き始めている方もいる。自分が立てない、歩けないなど身体機能を認知できない利用者の動きを早く職員がキャッチするために家族の了承の上、センサーマットを使用している方もいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	今年度は「職員倫理規定及び行動指針」を学んび、その中で虐待防止に触れている。5月には虐待防止の研修会の実施を予定している。身近な施設で虐待があったことが報道され、職場でも話題になり、してはいけないことだけでなく、通報の義務も理解した。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在は「成年後見制度」や「日常生活支援事業」の制度を必要とする方もいないが、今後は理解しておく必要があるため、次年度は研修に組み入れていく予定。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	時間をとって丁寧に説明している。特に利用料金や起こりうるリスク、重度化や看取りについての対応方針、医療連携体制の実際などについては詳しく説明し、同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族には「苦情」「要望」を直接職員へ伝えてくださいと常日頃からお願いしており、面会時には管理者からも「何かお気づきのことはありませんか」と声をかけている。そのためか、いろいろな意見を言って下さる方が多い。意向はケアプランに取り入れている。	利用者の多くは思いや要望を伝えることが出来る。難しい方もいるが職員は利用者本位を基本とし話し合っている。利用開始時居室を見て回り「この部屋がいい」とハケ岳が見える居室を決めた利用者もいる。機能低下を気にする家族には介護計画で運動時間を設け説明している。苦情・要望については運営推進会議でその内容や対応状況等を報告している。運営規程や契約書等に苦情処理に関する規定が記載されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会時には運営の方針について(お年寄りが主体であること)等、伝えながら、日頃感じていることを聞く機会を設けている。行事や外出についても職員が提案、計画し、実践している。	毎月1回ケアカンファレンスが開かれ、利用者に関することを中心に職員の気づき等意見を出し合い、話し合っている。職員は介護経験者や他業界からと様々であり、経験者が前職場での経験から業務に関する真新しい提案などをすることもあり、ホームにとって大きな力となっている。職員との面談については大切なことと捉えており今後行う予定である。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の資格取得へ向けて「自発的能力開発休暇」制度を就業規則に盛り込んであり、介護福祉士実技講習費用の施設負担及び講習日は出張扱い等、活用されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々に応じて研修受講計画を立て、法人内外の研修に積極的に参加している。介護福祉士実務者研修受講3名、認知症実践者研修1名、実践リーダー研修1名等、また日頃カンファレンスの時間に30分研修として、接遇マナー研修等実施している		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度は職員の介護の基礎知識習得を優先としたため、同業者との交流までは至らなかったが、次年度は長野県宅老所・グループホーム連絡会の主催する研修会に積極的に参加したいと思っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談では本人に会って、心身の状況や本人の気持ち、環境、何に困っているのか等、細かく教えていただき、入所初日は面談した職員が対応し、安心して新しい家に入ってこられるよう配慮している。また、全職員に、配慮する点を細かく伝えるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談で、ご家族の困っていること、不安なこと、要望等ゆっくり細かくお聞きする。その上で、私たちにできること、出来ないこと、ご家族に協力していただきたいこと等も伝え、「協力し合って利用者本人の生活を支えていきましょう」というお話をする。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所の相談を受けた段階で、その人に本当にグループホームが良いのか、それとも他のサービスで在宅生活が可能ではないのかという視点で関わり、実際、他の在宅サービスを選択された方もいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に生活する者同士として、本人の力を発揮できる場面作りを重要と考え、食事づくり、洗濯物を干す、たたむ等、暮らしの中でできることはやっていただき、共に支えあう関係づくりに留意している。季節行事では教えてもらう場面も多い。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にできることは家族にさせていただくことを基本としている。本人が家族に会いたいと言えば、一緒にご家族に電話をして会いたがっていることを理解していただく。「里心がつくから」と心配するご家族にも大丈夫だからと伝え、本人の気持ちを優先して協力を依頼する。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	所属していた踊りの会の発表会に出かけたり、馴染みの美容院に出かけたり、また毎月整体に通っている利用者もいる。ご家族や知人と気持ちよく出かけられるよう、支援している。	一人ひとりの事前情報は家族やケアマネージャー等から得ており、利用後も家族等と協力しながら馴染みの人や場との関係が継続出来るよう取り組んでいる。家族と近所の方や友人が訪問したり、教え子が利用者を訪ねてきたりと来訪者は多い。お盆やお正月に一時帰宅や1泊ないし2泊する方もいる。昔からの習わしや行事を地域の協力も得ながら取り入れていきたいとの思いもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	出来るだけお茶の時間など、一日に一度は利用者全員が集まり、会話ができるような時間を作っている。一緒に手作業をすること等を通して、利用者同士が協力し合ったり、関係が円滑になるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所に移られた場合でも(特養への移動2名あり)利用者の状況や様子を口頭や書面で伝え、きめ細かい連携に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話から本人の思いを聞き、出来るだけ意に添うよう努めている。また、パーソンセンタードケアやひもときシートを学び、カンファレンスでは、本人の意向中心の視点で日々検討している。	一人ひとりの思いや希望、意向を把握し個別の暮らしを支えるためのアセスメントを行い、できる限り意に沿えるように本人に合った形にしたいと取り組んでいる。日々の暮らしの中で「何々したい」「何々して欲しい」と思いを表す利用者もいる。お風呂に毎日入りたいという希望には日数を増やし応えている。レクリエーションなどに誘う時にも「やってみましょう」などと促しの声がけを工夫している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時にセンター方式の暮らしの情報シートへの記入依頼をし、本人はもちろん、本人が言えなくなっても家族から暮らしの希望等聞き取り、それに沿えるよう支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	関わりや気づき、日々の心身状態の記録もしくは口頭での確認により、スタッフ間で現状の把握に努めている。行事等を通じて今まで気づいていなかった利用者の持てる力を発見することもある。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族に記入していただいたセンター方式と本人の言葉及び日々の記録を参考に、介護計画を立てている。チーム全員が関わっての計画、モニタリングはまだできていないので次年度へ向けての課題となっている。	利用者を一番理解し気持ちを汲み取れる職員になって欲しいと担当制をとっている。本人や家族からの生活に対する意向をもとに計画作成担当者と担当職員が協力して作成し本人や家族に説明し同意を得ている。担当職員がアセスメントもしている。短期目標を6ヶ月とし見直もそれに合わせ、長期目標は更新期間としている。使い慣れないパソコンで介護計画を管理しているため職員が使い切れていないという課題がある。	パソコン操作を全職員が修得し、一人ひとりのより良い介護計画の作成に役立て、利用者の暮らしに活かされることを期待します。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は気づき、関わりを中心に個別に記録されており、職員間で情報の共有がなされている。また、個別の健康管理台帳もあり、日々の健康面の変化に気づきやすい。しかし、現状は介護計画の見直しに活かすきれていないので今後は活かしていきたい。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の状況によって職員配置や勤務時間の変更を行っている。入居だけにとらわれず、空床利用の短期入所も受け入れられるよう、認知症介護実践リーダー研修も受講した。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議で協力的な意見が出されたので、今後は地域資源の把握がしやすくなると思うが、現在はまだまだ多くは活用できていない。見守りボランティア、踊り、太鼓、三味線等で、余暇時間を楽しむことはある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人と家族の希望で選択している。看護師が受診の際にFAXや電話で連絡を取り合い、情報を共有しながら、適切な医療が受けられるようにしている。	遠方の方は本人や家族の意向もありホームの協力医などに変更している。現在半数以上の方が往診を定期的を受けている。外来通院の方は家族の付き添いを基本としているが家族の都合によっては主に看護師が付き添い受診結果を家族に報告している。歯科に関しては利用前から自宅に往診していた歯科医が継続してホームに出向き治療していることが多い。協力歯科医も家族やホームからの依頼で往診診療している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、医療連携体制を整えている。介護職員は利用者の体調や、表情の変化に気を付け、気づいたことを看護師に報告し、連携をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院となる場合、協力医療機関である諏訪中央病院へ入院している。その際、サマリー等によって利用者の支援方法に関する情報を提供し、入院中も職員が見舞ったり、家族とも情報交換している。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の意向を踏まえて対応していくことを看取りに関する指針として、契約時に説明し、意向の確認をしている。状況の変化に応じてその都度話し合い、その方に合った支援の方法が取れている。介護職員、看護師、主治医とも連携が取れている。	看取りに関する指針がある。利用契約時に重度化や終末期のホームの方針を伝えている。状態変化などが現れ、看取りの時期になった時、再度、意向を確認している。その後も家族の揺らいでいく思いに対しその都度、医師、看護師、関係職員を交えて家族と話し合っている。2名の方が事業所で最期を迎えている。利用者と職員と一緒に一階の玄関に迎えてお見送りしている。利用者は誰が亡くなったか分かっており、自分もこうしてもらえると感じているという。住み替え場所として特養施設に申し込まれている利用者も数名いる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時にいざと言う時、慌てないように、研修を職員全員が受けている。緊急時についてのマニュアルもすぐわかるように掲示してある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防署の協力を得て、利用者参加の避難訓練を行っている。アイリス駐車場で地区の防災訓練が行われたこともあり、防災協定は地域からも求められているため、次年度検討事項となっている。	年2回の災害訓練には職員、利用者が参加し消火、通報及び避難訓練を行っている。うち一回は総合訓練を行うと定めている。10月に複合施設合同の夜間想定訓練を消防署の協力の下、利用者も参加し行われた。ミニ訓練も不定期に行われており、直近では夜間に職員連絡網訓練を行っている。備蓄は委託業者に依頼しているが事業者側でも準備していく予定である。運営推進会議でも地区の避難場所や区の防災部員にとの依頼があり地域との協力体制を築きつつある。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入所時、どういう呼ばれ方をしたいか確認し、本人又は家族の希望する呼び方で呼んでいる。依頼型の言葉かけは「誠心会のころ」に記されており、基本であるが、親しみが馴れ合いにならないように注意している。	運営規程や契約書に人格の尊重、プライバシーに関する記載があり、接遇研修も必要に応じて行われている。利用者は苗字や名前に「さん」を付けて呼ばれているが元職業から「先生」と呼ばれる方もいる。入浴や排泄時は異性介助に関しては本人に確認している。運営推進会議上で職員の挨拶が良く感じがいいと評価されている。また、家族からも対応や笑顔がいいと好感を持たれている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中で、相手に合わせた理解しやすい言葉を使い、せかさずゆっくり待って本人の想いを言っていただけのようにしている。自分の想いを言える時は笑顔になる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	自室で過ごしたい方、ホールで過ごしたい方、テレビを見たい方、横になりたい方、それぞれに過ごしていただき、お茶の時間、食事の時間に声掛けをしている。入浴も、入る気になった時に入っていただいている人もいます。		

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時、自室の洗面所の鏡の前で櫛等を使用し整容している。衣類を選べる方には自分で選んでいただいているが、中にはご家族から「いろいろな服を着せてほしい」と言われ、職員が、いろいろな服を着られるよう選んでさしあげている人もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼食作りの際、包丁で切ったり、皮むきをしたり、その日の体調と気分に合わせて、できることをしていただき、一緒に食べている。食器を洗う、拭く等、男女問わず手伝ってもらっている。	委託業者が厨房で調理されたものが届けられているが、ホームでは朝・夕の御飯と味噌汁、昼食を利用者と一緒で作っている。月1回は選択メニューがあり利用者の楽しみの一つとなっている。全介助やミキサー食などの方もいるが食事はユニット毎、同じテーブルを囲み、会話しながら和やかな時間を過ごされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取量が1日を通して一目でわかるよう健康管理台帳に記入しており、朝摂れなければ10時に、といった形で水分摂取量に気を付けている。普通食の摂取が難しくなった方には食事形態を変えて提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の状態に合わせて、毎食後、自室洗面台に行っていただき、声掛けや介助で口腔ケアを行っている。その際、口腔内の状態把握にも努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者がその時に発するサインを把握して、できるだけトイレで排泄が可能となるよう支援している。特に排便を促すには、行きたいときにいつでもゆっくりトイレに座れることが大切と考えているため、居室にトイレを設置した。	利用者一人ひとりのデータに沿って排泄支援が行われている。排泄記録は誰が見ても分かるように統一されている。夜間帯は転倒に留意しながら本人のリズム(状況)に応じた排泄支援が行われている。7割の方がリハビリパンツを使用し、布パンツの方も数名いる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘が認知症状の憎悪につながることを職員は理解して、個々の人の排便チェックを行っている。乳製品や食事内容を工夫し、毎日ホーム内を歩く等の運動を行って予防している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	できるだけ本人の希望を考慮し、午後に入浴したい方、毎日入浴したい方等の希望にも沿えるようにしている。「入れる風呂」ではなく楽しみに「入る風呂」と考えます。	利用者の希望に沿った入浴支援が行われている。入浴は週2回の方が多いが5回の方もいる。季節に合わせて菖蒲湯、柚子湯、カボスやカリン湯などを楽しんでいる。また浴室からは遠くに八ヶ岳を望みそして道沿いの桜並木を眺めながら気分良く入浴ができ開放感がある。利用者の身体状況によってはチェアインバス(一階)があり無理なく安全に入浴できるよう準備されている。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後は午睡の時間として、横になっていた。それ以外の時間はなるべく離床して活動を促し、適度な疲労感を得ることで安眠につながるよう心掛けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個々のファイルに整理し、職員が内容を把握できるようにしている。処方の変更されたり、体調の変化があるときは連絡ノートに記録し、状態の観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で役割を持っていただくことで自信や活力につなげる取り組みを行っている。ハーモニカが得意だった方には吹いてもらって皆で歌ったり、演歌体操をしてもらったり、まだまだ発掘中です。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ぶどう狩りは行事として、紅葉狩りはちょっと何日間か、数人ずつ。花火大会は数人のみの参加だったが、行事としての外出は次年度4月から毎月実施予定。日常的な外出も買い物だけでなく散歩等、力を入れていきたい。	同じ法人の他施設の納涼祭に行きたいと希望した利用者数名と職員がドライブがてら出掛けている。3階からの見晴らしは良く、食堂のテーブルで外を眺めながら利用者からも「こうしていると気持ちいいの」との言葉があった。日常的な散歩は近くにある公園に出かけ、ハナノキ(春の濃紅色の花、秋の紅葉＝花楓)を楽しんでいる。また、建物の周りでノビロを採ったりしている。家族と外出を兼ね食事をしてくる方もいる。	季節もよくなるので個別や全体での外出ができるよう工夫されることを期待します。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	少量所持してもらっている方もいる。事務所でお金を預かっている方については買い物に行くときに本人に渡し、本人がお金を支払えるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人より希望があるときにはいつでもかけている。ご家族には理解していただいている。また、本人が携帯を所持し、毎晩娘へかけている方もおり、充電等職員が気を付けている。はがきを頂けば代読し、年賀状を出すのを頼まれたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は落ち着いた色が使われており、外の景色もよく見え、明るくゆったりとした造りになっている。また、季節に合わせた手造りの飾り物をして四季を感じていただけるようにしている。	ホームのある3階からは食堂の特大の1枚ガラスを通して住宅地や里山、大通りが見え、居室や廊下、浴室からは八ヶ岳など遠くの方まで見渡すこともでき開放感がある。利用者の作品(吊るし雛、塗り絵や切りえ、男雛と女雛)が壁や棚に並んでいた。エレベーターを降りると事業所のお知らせ、法人理念や事業所理念、職員の顔写真の下に各自の抱負が書かれた紹介パネルも掲示されている。	

グループホームアイリス茅野

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに食事席以外のソファを置いている。また、展望室には木のぬくもりのテーブルと椅子が置かれ、時々外を見入っている方もいる。テレビ前のソファ席は昼寝する人もいれば水戸黄門を見る時には早い者勝ちとなる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際、ベッドと備え付けの物入れ以外は使い慣れたものを持ち込んでいただくようお願いし、タンス、テーブル、椅子、コタツ等、個々にセットしてある。インターネットが使えるよう配線しており、使用している方もいる。	各居室はユッタリとした広さがありベランダ付きで、そこにいるだけでくつろげる雰囲気があった。静かな居室もガラス戸を開けると一気に外気が流れ込んでくる。吊るし雛を作るなど手芸が得意な利用者は持参した裁縫箱を見せ何時でも縫えるようにしている。ご主人の面会時に奥さんが何時も花を持参し飾っており、居室全体にフリージアの香りが漂っていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体がバリアフリーの造りになっていて、廊下・食堂以外にも共用のトイレや浴室等随所に手すりを設置している。キッチンを利用者が使いやすいよう低めの高さにしてある。		